

# みずえだに新聞

Vol. 29  
2019年10月  
秋号



## 読書の秋

今年の夏も本当に暑かったですね。皆さん、体調崩したりはされませんか？台風や集中豪雨によって全国各地では様々な災害に見舞われた夏でしたが、鹿児島はそういった意味では平穏な夏だったのかも知れませんね。

そんな夏からあつという間に朝晩はだいぶ過ごし易くなった今日この頃ですが皆さんいかがお過ごしでしょうか。さて、秋と言えば「みずえだに新聞」では毎年「読書の秋」にちなんでスタッフ全員に本に親しむをもってもらうために読書感想文を掲載しております。今年もみんな、素敵な「本」との出会いがあったのでしょうか？この後、紹介いたします。

私と言えますと、今回もどのような本を紹介しようかと、ぎりぎりまで頭を悩ませたのですが、次の二作品にしました。



まず一作目は鹿児島を代表する偉人、稲盛和夫先生の「心」です。稲盛先生の本はこれまでも何冊か読んでいますが、今回この企画のために本を探していたところ、ちょうど新刊として紹介されていたので、迷わず手に取りました。師は、人生で起こってくるあらゆる出来事は自らの心が引き寄せたものであり、すべては心が描いたものの反映である。だから、どんな心で生きるか、心に何を抱くかが、人生を大きく変えていく。それは人生に幸せをもたらす鍵であるとともに、物事を成功へと導く極意でもあるという。つまり「心がすべてを決めている」と述べています。

「私はだんだん年がいくに従って、ますますポジティブに明るく感謝して、と、いう生き方になってきました。一切ネガティブなことはかんがえまいと。それはネガティブな心が、ネガティブなもの呼び込むと考えるからなんです」稲森先生曰く。まさにこの本は「稲盛哲学」の集大成ともいえる本です。



もう一冊ご紹介致します。喜多川泰著「運転者」。この「運転者」とは「運」を転ずる者の事なんです。運とは、「いい」「悪い」で表現するものではなく、「使う」「貯める」で表現するもの。果たしてこれほどいう意味なのか？また、運が劇的に変わるとき、それを捕まえられるアンテナが存在するが、その感覚は上機嫌の時に最大になる。あるタクシーの運転手が主人公を幸福の道へと導いていきます。

## 西荳地区

### 敬老会にて講演



去る九月八日（日）、西荳公民館において、敬老会が催されました。その際、大先輩たちを前に歯科の立場から何か話をして欲しいとの依頼があり、緊張の面持ちで何とかその重責を果たしてまいりました。健康寿命をテーマに、「認知症」と「誤嚥性肺炎」の観点から話をさせて頂きました。スライドを見ながら説明したり、ビデオを見ながら、皆さんで嚥下体操をしたりと少しは歯科の重要性をご理解いただけたのではないのでしょうか。皆さん益々お元気で！

# 読書の秋!

恒例、スタッフによる

## 『読書感想文特集』

歯科衛生士 池増奈津美

「こんな夜更けにバナナかよ」  
渡辺一史著



読みたいと思ったきっかけは、映画化された時に読みたいと思った本を友人が持っていたので、今回借りて読んでみました。内容は進行性筋ジストロフィーという全身の筋肉が衰えていく病を患う鹿野さんとボランティアアたちの実話です。自分ひとりでは寝返りも打てない。だけど自由に生きたい。そんな思いから自ら集めたボラン

ティアに支えられての自宅暮らしは、わがまま放題。バナナが食べたくなったら、たとえ真夜中でもボランティアに頼んでしまう。他にもボランティアの一言では済まされないことも多々ありました。健常者なら普通に出来る事が出来ないのだから仕方がないのかもしれないと思ったり、でもわがまますぎるのでは、とも思いました。反面、鹿野さんとボランティアの人たちの関係は素敵だとも思いました。人が生きていくためには健常者も障がい者もたくさんの人との関わりが必要だと思えました。私も事故や病気で体の自由が奪われる可能性があるかも知れません。そんな周りの人との関わり方について考えさせられました。

幸い元気に生活できている今に感謝です。



歯科衛生士 川野真代

「木洩れ日に泳ぐ魚」

恩田陸著

この本は、一緒に暮らす男女が二人で過ごす最後の夜に、一つの事件について語ることで関係性が壊れていきます。お互いが自分を守り、相手を疑い、夜明けに向かって少しずつ明らかになっていきます。二人の男女は互いを血のつながった兄弟であると認識して、幼い頃は別々の生活だったことから、二人の時間を取り戻すために一緒に暮らし始めます。あるとき山地に旅行したとき、二人の母と離婚し出生すら知らない父が山地ガイドとして付きました。そこで悲劇が起きたのです。山地ガイドの父が崖から転落死。互いに自分を守り相手を疑い、そう考えたまま数年が過ぎていきました。語ることで少しずつ明らかになる関係性。コロコロと簡単に変わっていく人間の心の不思議。続きが気になって短時間で読めました。気になる方は是非読んでみて下さい。



歯科衛生士 西野佳奈

「私は私のままに生きることにした」  
キム スピョン 吉川南著



私がこの本を選んだ理由は、帯に「韓国で70万部、日本で15万部突破! みんなそれぞれに幸せになろう」と書いてあるのと、表紙の絵がかわいかったので選びました。この本は小説などではなく著者からの70のメッセージが書いてあります。世界にたった一人しかいない「自分」を大切に生きていくために、ありのままの自分として生きていくために・・・。つらい時、思い詰めたとき、悩んでいる時などに読むと、背中を押してくれるような気持ちになります。是非読んでみて下さい。

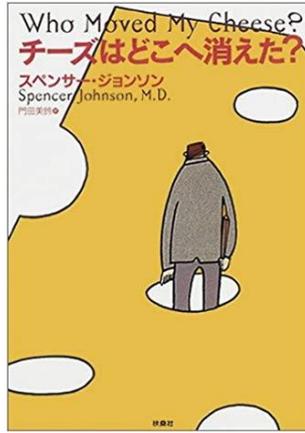
歯科助手

はたなか

もえ

「チーズはどこへ消えた？」

スペンサー・ジョンソン著



この本を覚えていてるでしょうか？世界的トップ企業の社員教育に相次いで採用された事で話題となり、1999年度「全米ビジネス書ベストセラー」で第一位に輝き、今でも全世界で1800万人に読み継がれているこの本。チーズ(仕事、家族や恋人、財産など私たちが人生で求められるものの象徴)をキーワードとした物語を通して変化の従え方を説いている本。物事が変化していくことを理解していても、変化するのが怖い人は少なくないと思います。でも、必ず変化は訪れるし変わらなければいけない時が来る、ピンチでありチャンスであるかもしれない。その時に全てを受け入れられるか、変化を楽し

み進めるか、現状維持は衰退。この考え方がすべてを左右する。普段は気にしないでいる「大事なことに改めて気づかせてくれる、もっと柔軟な人間になりたいと思わせてくれる、そんな本でした。

歯科衛生士

たにくち

むつみ

「あの」の夢を見たんです」

山里亮太著



私は最近結婚し話題になった、お笑い芸人の「山里亮太」さんが書いた本を読みました。この本は16人の女優さんやアイドルをイメージして書かれた短編小説集なのですが、定番のスクールライフや芸能界での話だけでなく、宇宙空間での話やAIに支配された世界での話など非現実的な物語が多く、わくわくして引き込まれました。

物語の中で”ヤマ”という名前や”赤い眼鏡”など、作者「山里亮太」をモチーフにしてているんだらうなというもの何回も登場するので、(怪獣だったり、妖精だったり)そこが見所です！私は広瀬すずさんをモデルに書かれた、「すずとヤマ」という物語がお気に入りです。心温まる物語が多いので、皆さんも是非読んでみて下さい。

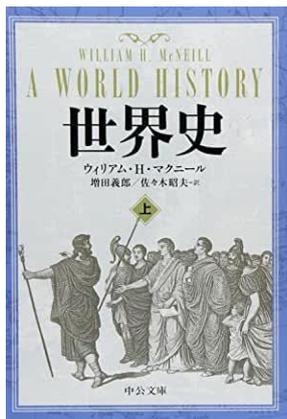
なかもと

きみこ

アルバイト 中元 公子

「世界史 上巻」

ウィリアム・H・マクニール著



この本を手にとったきっかけは、今まで読んでこなかったジャンルの本を読んでみようと思ったことです。また、高校時代は理系を選択し、世界史につ

いて詳しく学んだことがなかったため、新たな知識に出会う良い機械であるとも考えました。この本は上・下巻に分かれていて今回は上巻を読みました。各地域、文明について時系列順に書かれていて、読み始めた時は少し難しい高校の教科書のように感じました。しかし、読み進めていくとまるで小説を読んでいるように、自分の頭の中で情景を思い浮かべながら読むことができ、読書の醍醐味を感じました。特に印象に残った話が、日本独特の文化だと考えられる、侍や茶の湯の文化がその文化を形成するための刀に使う鉄・茶葉が中国やインドから伝わったことから発展した、ということです。このように長い時間を通じて、今ある全ての国の文化は、異文化から学び、融合してきた側面があることを学びました。普段大学では学ばない内容の本を読んでみて、知識の幅が広がり、物事の新しい捉え方も見つげられた気がします。この秋に下巻も挑戦してみたいです。



歯科助手

「しほり」  
郷原

りこ  
理子

「キレる！」

中野 信子著



この本は”キレる“という感情を脳科学的に分析していて、キレる方法とキレられた時の対処法などが書かれています。本では様々な”キレる“について書かれているのですが、例えばテレビに出てくるタレントさんの中には”怒って“キレて”みんなを盛り上げて”いる「有吉弘行」や「マツコ・デラックス」など辛口で鋭くツッコミを入れ、ときには怒りをあらわにして大声を出すなど、”キレキャラ“とされています。ただこれは単にキレているのではなく、状況を素早く判断し、絶妙なタイミングで上手に言葉を選んで、

鋭くキレています。キレることにより、”怒るほど本当なんだ“という勢いで周囲を巻き込み、同調を得ることもできます。といったとても内容の濃い本です。興味がある方は是非読んでみて下さい。

受付事務

いまかけ まな  
今掛 真菜

「MOMENT」

本田 孝好著



自分が末期の入院患者で死ぬ前にひとつ願いが叶うとしたら・・・、私なら誰に何を望むだろうか。この本をきっかけに自分にもいつか必ずやってくる死をどう受け入れて、どのようにに人生を悔いなく終えたいのかを考えさせられる一冊でした。少し寂しいテーマではありますが、

リアリティのある内容で今の自分にはまだ分からないけれど、生きてる今を精一杯生きようと思えました。また、医者でもないバイトでいた大学生の主人公がその願いをできる限り叶えようとしていて、末期の患者さんの最後の望みに寄り添える優しい人柄と尊い命の重みを伝えてくれた物語でした。面白いので是非読んでみてください！

歯科衛生士

まつだ りな  
松田 梨菜

「ママにはなれないパパ」

鈴木 おさむ著



今回私がこの本を選んだ理由はSNSでもフォローさせていただいているくらいこのご夫婦のことは好きだということ、私自身も今もうすぐ2歳になる息子の子育て真っ只

中なので共感できたり勉強になったり、この家族からなんか元氣もらえそうな気がして選びました。前半は読んであるある！と共感できるところがいくつかあり吹き出してしまいうことも多々ありました。主人にも読んでみて！と、勧めてみました。後半は今まだ2歳になってないので今から経験するであろうこともたくさん描かれていてワクワク、ニヤニヤしながら読みました。そして最初とは少しずつ変わっていく家族のカタチ。夫婦のカタチ。幸せのカタチ。を、楽しみながら過ごしていけたらと主人と話しかたでした。やっぱり私にとっては元氣が貰えた本でした。

お知らせ

★十月一日よりの消費税の増税に伴いまして、自費診療の料金も変更になります。  
★十月十日(木)・十一月二十二日(金)・十二月五日(木)は研修のため休診と致します。



# ニューフェイス紹介

受付事務 **佃 春花**  
つくだ はるか

「あの日見た花の名前を  
僕達はまだ知らない」  
岡田 磨里著



以前も歯科医院で働いていましたが、違う部分も多いので、慣れるように頑張ります。タピオカが好きで、

週3回は飲んでいきます。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

幼い頃は仲が良かった宿海仁太、本間芽衣子、安城鳴子、松雪集、鶴見知利子、久川鉄道らの6人の幼馴染みたち。6人は「超平和バスターズ」という名のグループを結成し、秘密基地に集まって遊んだりしていました。しかし突然の芽衣子の死をきっかけに、彼らの間には距離が生まれてしまいい、後悔や未練や負い目を抱えつつも、高校進学後の現在では疎遠な関係となりみんなバラバラになってしまっています。数年後、引きこもり気味の生活を送っていた仁太の所に死んだはずの芽衣子が現れ、彼女から「お願いを叶えて欲しい」と頼まれます。そのときはこれを幻覚であると思おうとする仁太でしたが、その存在を無視することは出来ず、困惑しつつも芽衣子の願いを探ることにしました。それをきっかけに、それぞれ別の生活を送っていた6人は再び集まり始めます。作品の中では秘密基地や、ゲームで対戦した思い出が描かれたりと、幅広い世代の人が読める作品になっていて、命の大切さ、仲間の死について考えさせられる感動の物語です。

受付事務 **梅北 夏樹**  
うめきた なつき



初めまして新人の梅北です。歯科医院で働くのは初めてで、右も左もわからずご迷惑をかけてしまうかもしれませんが、優しい先輩スタッフの方々に教えて貰いながら毎日勉強です。患者様に安心して貰えるように笑顔を決やさずに一所懸命に頑張りますので、これからよろしくお願いします。



滅菌係 **室屋 美津枝**  
むろや みつえ

八月からちよっと遠い桜ヶ丘から通っています。

今年古希を迎え、ますます元気！健康第一をモットーに「いつもニコニコ、明るい笑顔」で、患者様のお役に立てるよう、楽しく仲良く頑張っていきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

歓迎会の様子です！



# 幸恵先生の 歯のはなし



朝、夕はすっかり涼しくなり、きれいな夕焼けなど、秋の訪れを感じるようになってきました。秋と言えば毎年そうですが、食欲の秋、読書の秋を堪能し、スポーツの秋は見る方に専念と言ったところでしょうか。

今年の私のテーマ「初めて」は宝山ホールに「お芝居」を観に行ってきたよ。「蘭」という緒方洪庵をテーマにしたお芝居でしたが、喜劇で、久本雅美さんなど有名人を生で見たとミラーな感動の楽しい時間でした。さて、恒例の読書感想文に今回私が選んだのは「星の王子さま」です。有名な本なので読んだことのある方も多いかもれません。この本は、優しい



挿絵が印象深く、読んだ年齢によって感じ方が違うと言われ、何度も読み返すことがお勧めされてる事は知っていましたが、読むのは初めてでした。砂漠に不時着した「僕」が他の星から来たという、ちいさな男の子「星の王子さま」と出会うお話です。王子さまは、家一軒分より少し大きいくらいの星に住んでいました。王子さまは、その星にどこからか運び込まれた種から誕生したバラの花をとても愛していました。やがてわがままなバラの花を信じることができなくなり、自分の星に別れを告げ、いくつかの星を旅しながら地球にやってきたと話します。その旅の途中で、命令ばかりの王様の星、大物気取りの男の星、酒浸りの男の星、実業家の星、ガス灯に火を灯したり、消したりする男の星、地理学者の星を巡ります。それぞれの星の住人は、童話の登場人物というより現代社会を風刺したもののよう感じられます。そして地球にたどり着いた王子さまは、キツネと知り合い、自分の星を飛び出す原因となったバラの花が、王子さまに

とってかけがえのないものだったと気づかされるのです。キツネは王子さまに言います。「ものごとはね、心で見なくてはいく見えぬ。いちばんたいせつなことは目に見えない。」王子さまは、自分の星に残してきたバラのため星に帰ることを決意します。遠く小さな星に帰るために、王子さまが選んだ方法は、金色のへびの毒で魂になって帰るといふものでした。そして「僕」に別れを告げるのです。子供向けの童話のように思いつながら読み進めました。ページをめくるたびに考えさせられることが次々に描かれています。子供のころには誰にでも見えていたのに、大人になると見えなくなるものに、バラの花との会話は男女の愛について考えさせられます。キツネとの会話はたくさんさんのバラの中で、自分のバラだけがなぜ特別な存在となるのか、そして「僕」とのお別れの時の会話は、大切な人がこの世から旅立つ時の切なさ、旅立っていく人の希望が描かれていると思います。読み終えると、何とも言えない切なさと共に優しい気持ちにさせてくれる本でした。出会いには意味があると常々考えていますが、今回この本を手にとったのも、そうい

う事を考える時期なのだと思えました。大人になり、理屈で物事を考えるようになると、見えなくなってしまうことが多くなっているのかもしれない。

運動会の季節。嫌だった運動会と大好きだった母の作ってくれたお弁当も大切な思い出です。私の母は、常々「あの世に持っていけるのは、思い出だけ。欲しい物は何も無い。」と言っています。まだまだ、食欲、物欲に勝てない私は若いという証拠だと自分に言い訳していますが。

星の王子さまとの出会いは「いちばんたいせつなことは目に見えない」わかっていくようで、日々の生活の中で忘れてしまいがちなことを思い出させてくれました。愛、そして健康も目に見えない大切なことのひとつですね。

## 編集後記

毎年「秋号」はスタッフの読書感想文が掲載され、他の号以上に好評をいただいております。今回はいかがだったでしょうか？